

西部第一落合遺跡群（6）

前橋都市計画事業西部第一落合土地地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 5

前 橋 市 教 育 委 員 会

西部第一落合遺跡群（6）

前橋都市計画事業西部第一落合土地地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 5

前 橋 市 教 育 委 員 会



調査区全景（南から）



W-1 全景（西から）



W-1溝状遺構(東から)



W-1平場状遺構(南から)



調査区北側全景(西から)



調査区北西部土層堆積状況(東から)



遺構外-2 (1/6)

内面に煤が付着している瓦

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する西部第一落合遺跡群（6）は古代上野国の中枢地域の調査であり、上野国府推定域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の確認はかないままでしたが、西部第一落合遺跡群（1）で検出された古代の大溝の続きを確認することができました。こうした調査成果の積み上げが国府や国府のまちの姿の再現に繋がると考えております。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和7年1月

前橋市教育委員会
教育長 吉川 真由美

例 言

1 本報告書は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う「西部第一落合遺跡群（6）」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査および整理作業の体制は以下のとおりである。

遺跡名	西部第一落合遺跡群（6）（包蔵地名：前橋市0142遺跡）
遺跡コード	6 A 293
遺跡所在地	群馬県前橋市元総社町2510-2、2511の各一部
監理指導	阿久澤友之（前橋市教育委員会）
調査担当	佐野良平（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和6年7月10日～令和6年8月30日
整理・報告書作成期間	令和6年9月2日～令和7年1月31日
発掘調査・整理作業参加者	丸山和浩 大川明子 細野竹美（技研コンサル株式会社） 秋山 修 新井 實 上沢公一 加藤知恵子 菊田武明 北爪二郎 高津邦道 土屋和美 富岡信行 萩原愛実 早川絵里奈 松下 明

3 本書の編集は佐野が行い、原稿執筆についてはIを阿久澤、その他を佐野が担当した。

4 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管されている。

5 下記の機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

山下工業株式会社

凡 例

1 挿図中に使用した北は座標北であり、座標については日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅱ系を使用した。

2 挿図に国土地理院発行1/25,000「前橋」、1/50,000「前橋」・「榛名山」、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、溝：W、土坑：D、ピット：Pである。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構 溝…1/60、1/100 土坑、ピット…1/60 全体図…1/200

遺物 土器…1/3、1/4 瓦…1/4

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、[]は復元値を表す。

6 遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。その他各図トーンを参照されたい。

遺物実測図 須恵器（断面）： 灰釉陶器（断面）：

7 主な火山灰降下物等の略称と年代は次のとおりである。

浅間B軽石（As-B）・・・嘉承三年、天仁元年（1108）浅間山噴火による降下テフラ

榛名ニッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）・・・6世紀中葉の榛名山ニッ岳噴火による降下テフラ

榛名ニッ岳伊香保テフラ（Hr-FA）・・・5世紀末～6世紀初頭の榛名山ニッ岳噴火による降下テフラ

浅間C軽石（As-C）・・・3世紀後葉～4世紀初頭の浅間山噴火による降下テフラ

目次

巻頭図版1	
巻頭図版2	
はじめに	
例言・凡例	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 調査方針と経過	4
IV 基本土層	4
V 遺構と遺物	5
VI まとめ	16
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

Fig.1 遺跡の位置	
Fig.2 調査区位置図	1
Fig.3 周辺遺跡図	2
Fig.4 グリッド設定図	3
Fig.5 基本土層	4
Fig.6 調査区全体図	7
Fig.7 W-1号溝(1)	8
Fig.8 W-1号溝(2)	9
Fig.9 W-1号溝(3)	10
Fig.10 W-1号溝(4)	11
Fig.11 W-2~4・6・7号溝、D-1~3号土坑、P-3・4号ピット	12
Fig.12 W-5・8号溝、P-5号ピット	13
Fig.13 出土遺物	14
Fig.14 W-5周辺の溝	17
Fig.15 西部第一落合遺跡群(6)周辺の古墳時代の景観想定図	18
Fig.16 西部第一落合遺跡群(6)周辺の古代の景観想定図	19

表目次

Tab.1 周辺遺跡一覧表	2
Tab.2 西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表	3
Tab.3 溝・土坑・ピット計測表	15
Tab.4 出土遺物観察表	15

写真図版

PL.1 調査区全景 W-1全景 W-1南側側面近景 W-1南側近景 W-1北側立ち上がり部全景
PL.2 W-1溝状遺構全景 W-1平場状遺構全景 W-1全景 W-2全景 W-3全景 W-3・6全景
PL.3 W-4全景 W-5全景 W-7全景 W-8全景 D-1、P-3・5全景 D-3全景 総社砂層堆積状況
PL.4 出土遺物

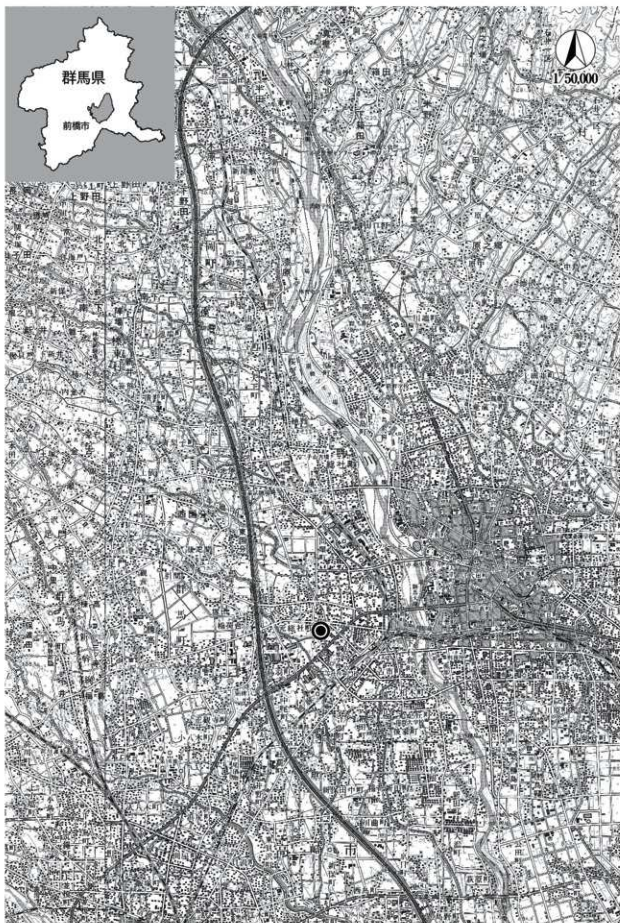


Fig.1 遺跡の位置

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市長 小川 晶（区画整理課）（以下「前橋市」という。）が施行する前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴い実施され、6年目にあたる。本事業地周辺は、上野国府推定域が近接すること、北側では元総社蒼海土地区画整理事業に伴い、20年以上に亘り発掘調査が実施され、数多くの貴重な調査成果を得ていることなどから、濃密な遺跡地として認識されている。

令和5年10月3日付けで前橋市より、埋蔵文化財確認調査についての依頼書が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。これを受け、市教委で同年10月13日に試掘確認調査を実施した結果、遺構が検出されたため、埋蔵文化財の取扱いについて前橋市と市教委で協議を行った。工事計画から遺構の現状保存は困難であるため、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意に至った。

令和6年4月9日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意した。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年7月9日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「西部第一落合遺跡群（6）」（遺跡コード：6A293）の「西部第一落合」は土地区画整理事業名を採用し、「（6）」は当該土地区画整理事業において6番目に実施した発掘調査として付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本遺跡が所在する前橋市元総社町は前橋市街地中心から南西約4kmに位置し、市街地西端部にあたる。周辺は市街地化が進んでいるが、現在も畑地が多く残る場所でもある。遺跡南東約200mには国道17号線高崎前橋バイパス、北側約200mには県道10号線（前橋安中富岡線）、西側約1kmには関越自動車道が南北に走っている。本遺跡の東西には相馬ヶ原扇状地を源とする牛池川と栄谷川が流れ、両河川に挟まれた地域に遺跡は立地する。落合地区は榛名山南東に広がる相馬ヶ原扇状地から前橋台地といった平野部へと移行する地帯である。

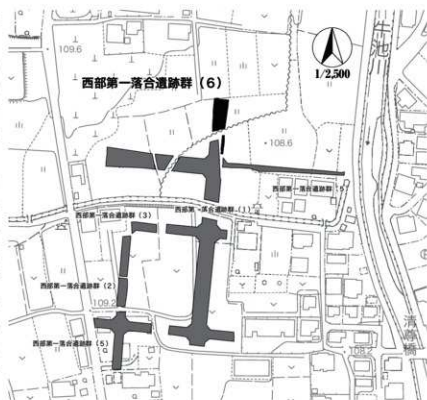


Fig.2 調査区位置図

2 歴史的環境

前橋市の南西部に立地する本遺跡は、周辺域に上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連絡と遺跡が広がる地域である。開越自動車道建設や元総社蒼海土地区画整理事業などに伴う発掘調査が継続的に行われ、これまで多くの遺構・遺物が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

縄文時代の遺跡は八幡川右岸の微高地上では産業道路東遺跡・産業道路西遺跡、柴谷川左岸自然堤防上では上野国分僧寺・尼寺中間地域・元総社小見遺跡・元総社蒼海遺跡群（24）、牛池川左岸自然堤防上では元総社蒼海遺跡群（7）・（9）・（10）などが挙げられ、各遺跡で堅穴住居跡が確認されている。

弥生時代に入ると当該期の遺跡は上野国分僧寺尼寺中間地域・正観寺遺跡などがあるが、その分布は散在的である。牛池川自然堤防上にあたる元総社寺田遺跡Ⅲでは後期の住居群が確認されている。

古墳時代になると利根川右岸の地域は県内でも有数の古墳密集地域となる。代表するものとして総社古墳群が挙げられ、古墳時代後期・終末期に亘り首長墓が多数築造される。この時期には山王塚寺が建立され、総社古墳群を含め、政治の中枢地域となる。この時代の集落は牛池川・柴谷川沿いの自然堤防上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。

奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺・国分尼寺の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

落合地区周辺では高崎市浜川町周辺からN-64°-E方向へ東山道（国府ルート）が延びると推定されている。前橋市域では平成28年度上野国府等範囲内容確認調査45a・bトレンチにおいて2時期の両側側溝を持つ道路跡を確認している。鳥羽遺跡でも2条の道路跡が検出されている。日高遺跡では幅約4.5mの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。西部第一落合遺跡群（1）では推定東山道の駅跡と考えられていた低地部から上幅18m、深さ1.8～2.4mの大型の溝が確認された。溝底面の出土遺物や覆土中にAs-Bが確認できることから古代に開削された溝と想定されている。



Fig. 3 周辺遺跡図 (S=1/25,000)

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	西部第一落合遺跡群 (6)	10	産業道路東遺跡	25	天神遺跡・Ⅱ遺跡
2	上野国分寺跡	11	産業道路西遺跡	26	天神首遺跡
3	上野国分尼寺跡	12	稲荷保遺跡東遺跡	27	関皇跡遺跡
4	山王塚寺跡	13	元総社中学校遺跡	28	関皇跡西遺跡
5	推定東山道国府ルート	14	元総社北小学校遺跡	29	原敬遺跡・Ⅱ遺跡
6	推定日高道	15	元総社北川遺跡	30	藤原遺跡
7	稲荷山古墳	16	元総社牛池川遺跡	31	藤原Ⅱ遺跡
	元総社蒼海遺跡群	17	上野国分僧寺・尼寺中間地域	32	天友原飯田・Ⅱ遺跡
	元総社小見遺跡・Ⅱ-V遺跡	18	元総社西川遺跡	33	元総社明神遺跡Ⅰ-Ⅲ
	元総社小見内遺跡・Ⅱ-V遺跡	19	上野国分寺西遺跡	34	元総社寺田遺跡Ⅰ-Ⅲ
8	元総社倉作遺跡・V遺跡	20	堀田村倉遺跡	35	寺田遺跡
	総社甲稲荷塚大道西遺跡・Ⅱ-Ⅲ遺跡	21	鳥羽遺跡	36	元総社小学校校跡遺跡
	総社南塚明神北遺跡・Ⅱ-V遺跡	22	鳥羽遺跡・Ⅱ遺跡	37	元総社落合遺跡
	元総社土庫遺跡	23	元総社松島遺跡	38	中塚遺跡
9	呂桑寺前内遺跡・Ⅱ遺跡	24	元総社早乙女遺跡	39	西部第一落合遺跡群

当該期の一般的な集落は、牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府城と居住域の区分けが看取できる。

室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海道跡群では蒼海城の堀跡が多く検出されている。天正年間以降は諏訪・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、慶長六年（1601）に秋元長朝が総社城に移ると同時に蒼海城は廃城となった。

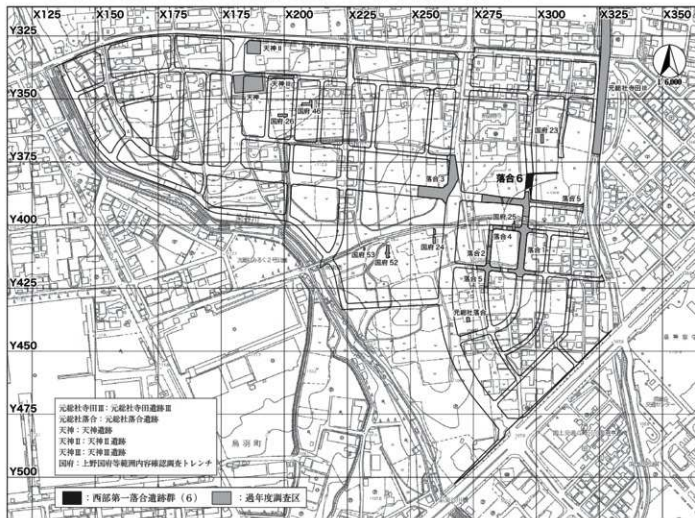


Fig.4 グリッド設定図

Tab.2 西部第一落合遺跡群周辺遺跡一覧表

遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
天神遺跡	1996	奈良・平安 住居跡、井戸、土坑、白磁・青磁・灰釉陶器
天神Ⅱ遺跡	1999	奈良・平安 住居跡、井戸、土坑、土師器・磁器器・石器
元総社寺田遺跡Ⅱ	1996	縄文・土坑 弥生・住居跡 古墳 住居跡、水田、倉 奈良・平安 住居跡、井戸、土坑、溝、河道路 中世 蒼海城外堀、井戸定置・土坑、井戸、倉、土師器本製品、唐瓦土器（磁器、瓦、野焼）、漆器付着土器、緑釉陶器・灰釉陶器、白磁・磁、行筒、風子、私瓦、土胎、形代（瓦形・刀形・厚形等）、漆器、磁器、漆器・陶器類、青磁、石灯・土管
天神遺跡Ⅲ	2008	奈良・平安 住居跡、屋敷建物跡、土師器土器 中世以降 堀・溝、土師器 緑釉陶器・灰釉陶器、土器付着土器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ23	2013	中世 住居跡、溝、土坑、ビッド、土師器土器高台内堀、灰釉陶器、磁器土器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ24	2013	中世 溝、土坑 近世以降（溝、土坑埋め込み等）
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ25	2013	平安 溝、中世 土坑、ビッド、唐瓦土器、土師器土器（赤、黒）、青瓦土器（瓦葺）、灰釉陶器・磁器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ26	2013	平安 住居跡、溝、中世 近世以降遺構、土師器土器・灰釉陶器、漆器付着土器、土坑
元総社遺跡Ⅲ	2014	奈良・平安 住居跡、土坑、土師器土器（唐瓦土器）、土師器、磁器器
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ46	2016	古墳 住居跡（4世紀代） 奈良・平安 住居跡、溝、土坑、ビッド 中世 溝、土坑、ビッド等（唐土建物跡） 土台瓦葺・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁（唐平水瓦）
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ52	2018	中世 溝、ビッド 近世以降 近世以降遺構 灰釉陶器・唐瓦土器・青磁、瓦葺
上野国府等範囲内容確認調査トレンチ53	2018	近世 畚斗形田圃跡
西部第一落合遺跡群（1）	2020	古墳 長瀬 平安 聖穴建物跡、溝、井戸、土坑 中世 蒼海城外堀 瓦（瓦葺）土坑、灰釉陶器・緑釉陶器、唐瓦土器、唐瓦（刀形等）、形代等、土管
西部第一落合遺跡群（2）	2021	古墳 古墳 奈良～平安 聖穴建物跡、土坑、中世 井戸、土坑、ビッド 緑釉陶器・灰釉陶器
西部第一落合遺跡群（3）	2021	平安 溝、井戸、土坑、磁器器、中世 溝・漆、近世建物跡、井戸、土坑、ビッド 近世以降 古墳、近世以降遺構
西部第一落合遺跡群（4）	2021	古墳 溝 奈良～平安 聖穴建物跡、墓室、土坑 中世 溝、井戸、土坑、形代、緑釉陶器・灰釉陶器
西部第一落合遺跡群（5）	2021	古墳 聖穴建物跡、水田、倉、溝、平安 聖穴建物跡、溝、土坑 中世 井戸、ビッド 灰釉陶器・緑釉陶器、唐瓦土器・瓦葺（土瓦）・土胎（瓦製品）
西部第一落合遺跡群（6）	2024	古墳 溝 平安 溝、土坑、ビッド 土師器・磁器器・灰釉陶器

Ⅲ 調査方針と経過

委託調査箇所は前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業地内であり、北側と南側の調査区に分かれている。調査面積は265㎡である。グリッド座標については近隣調査との整合性や以後の拡張性を考慮して元総社蒼海遺跡群の調査で使用されている任意グリッド座標（国家座標（日本測地系第Ⅸ系） $X = 44,000,000$ 、 $Y = -72,200,000$ ）を基点とする4mピッチのものを使用した。なお経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとおりである。

測点 日本測地系（第Ⅸ系） 世界測地系（第Ⅸ系 測地成果2011）
 $X 297$ 、 $Y 383$ $X = 42,468,000$ m、 $Y = -71,012,000$ m $X = 42,822,947$ m、 $Y = -71,303,777$ m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.25㎡バックホー）にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。W-1については出土遺物等に細心の注意を払いながら重機での掘削を行った。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、遺構に伴うと判断したものはNo遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行った。記録写真は35mm判モノクロ・リバーサルフィルムと、デジタルカメラの3種類を用いて撮影を実施した。調査区全景についてはドローンをを用い撮影を実施した。

調査経過については以下のとおりである。

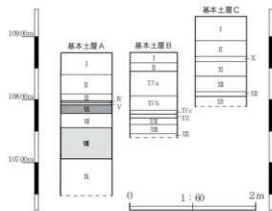
項目	1面	2面
表土掘削	令和6年7月31日～令和6年8月5日	令和6年8月28日
遺構調査	令和6年7月31日～令和6年8月20日	令和6年8月28日
調査区全景撮影	令和6年8月21日	令和6年8月28日
発掘調査完了検査	令和6年8月28日	
埋め戻し作業	令和6年8月28日～令和6年8月30日	

Ⅳ 基本土層

基本土層は北側調査区2箇所と南側調査区1箇所、合計3箇所に観察を行った。観察地点については「Fig.6 調査区全体図」を参照。

低地部にあたる北側調査区では灰白色土（基本土層Ⅳ層、総社砂層）上面を第1面として遺構確認調査を行った。当初、第1面をHr-FA上面、第2面をHr-FA下面（C黒面）と想定していたが、土層の堆積状況を観察したところ誤認していたと判明。そのため、第1面を総社砂層上面、第2面はC黒面とした。C黒面が残存する北西部以外は古代以降の削平を受けC黒面は消失している。

微高地にあたる南側調査区ではⅣ層を遺構確認面とし調査を行った。調査区は西部第一落合遺跡群（5）1区大溝の遺構内にあたる。そのため全体的に砂礫やシルトなどの砂質土層であった。



- 基本土層
- I 表土層
 - II 暗褐色土 (10YR2.5/2) 灰色粘土・少量含有。締り有り、粘性有り。
 - III 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - IV 赤い灰褐色土 (10YR7/2) 10r-FF赤灰地層。締まり有り、粘性有り。
 - V 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色シルト層。締り有り、粘性有り。
 - VI 赤い灰褐色土 (10YR7/2) 10r-FA赤灰地層。砂質土。締まり有り、粘性有り。
 - VII 暗褐色土 (10YR2.5/2) AaC褐色粘土質土層。締まり有り、粘性有り。
 - VIII 暗褐色土 (10YR2.5/2) AaC褐色粘土層。締り有り、粘性有り。
 - IX 黄褐色土 (10YR5/2) 砂質土。締り有り、粘性弱い。
 - X 赤い灰褐色土 (10YR7/2) 砂質土。砂り少含有。締り有り、粘性有り。
 - XI 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色シルト層。砂り少含有。締り有り、粘性有り。
 - XII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XIII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XIV 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XV 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XVI 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XVII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XVIII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XIX 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XX 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXI 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXIII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXIV 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXV 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXVI 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXVII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXVIII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXIX 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXX 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXI 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXIII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXIV 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXV 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXVI 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXVII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXVIII 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XXXIX 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。
 - XL 暗褐色土 (10YR2.5/2) 暗褐色粘質土層。締り有り、粘性有り。

Fig.5 基本土層

V 遺構と遺物

1 概要

低地部にあたる北側調査区では総社砂層上面を第1面とし、第2面は調査区北西側でみられるAs-C軽石混入黒色土(C黒)上面を遺構確認面として調査を行った。第1面では調査区の大部分(中央から南側)が古代から中世にかけての溝(W-1)に占められている。溝範囲外の北側では溝が5条、土坑3基、ピット2基が検出されたが、いずれも覆土状況から古代の所産と考えられる。第2面は調査区北西側の狭い範囲での調査となった。古墳時代の溝と考えられるW-8は大部分が調査区外であり、今回の調査では東側の立ち上がり部分がのみが確認された。

微高地にあたる南側調査区は前述のW-8の埋没範囲内に該当する。そのため土層は砂質土が中心であった。検出された遺構は溝1条、ピット1基であり、2つとも古代の所産と考えられる。

2 溝

W-1号溝 (Fig. 7～10・13, Tab. 3・4, PL. 1・2・4)

西部第一落合遺跡群(1)で検出されたW-1と同一の遺構である。位置 X295～298、Y380～385 確認面 第1面 主軸方向 N-70°-E 規模 確認長10.02 m、上幅(13.52) m、下幅4.35 m、深さ2.75 m。形状 断面形状は階段状の逆台形を呈する。土層 砂質土が主体。中～下位にAs-B軽石一次堆積層が確認できる。底面の状況については湧水が激しく詳細は不明だが、やや凹凸のある平坦であり、底面土層は固く締まった土であった。底面直上には砂利層の堆積が確認されている。施設 溝北側中段に平坦な面を造り出している遺構(平場状遺構)が存在する。規模は長軸4.06 m×短軸2.63 m、主軸方向はN-50°-W。平面形状は隅丸方形を呈し、南方向以外に壁が立つ。壁高0.35 m前後。底面は凸凹があるものの比較的平坦である。柱穴は確認されていない。平場状遺構の北側には溝状の遺構が伸びる(溝状遺構)。規模は長軸5.03 m×短軸1.00～3.06 m、深さ0.27～0.53 m、主軸方向はN-9°-E。底面は南から北へ向かって緩やかに上がる。遺構上端部が北から南へ向かって広がっていることから平面形状は三角形を呈する。この2つの遺構は位置関係や覆土状況が共通することからW-1に付随する遺構と考えられる。性格等については「Ⅵ まとめ」にて考察を行っている。出土遺物 灰軸陶器・須恵器・土師器の破片が出土している。主に平場状遺構の底面付近での出土が顕著であり、底面直上に砂利層(Fig. 8、22層土の下位)が確認されていることから、流れ込んできた土器であると考えられる。覆土上～中位では中世に帰属すると考えられる土器も少量ではあるが出土している。中層以下で出土した灰軸陶器段皿(1)、須恵器壺(2)、上層で出土したかわらけ(3)を図示。時期 西部第一落合遺跡群(1)W-1の東側延長部分であり同一の溝であることや、底面付近にAs-B軽石一次堆積層が確認できることから、10世紀以前に開削された溝と想定される。As-B軽石堆積以降は水の流れはそれまでと比べ弱くなったようで、土層断面では底面に厚く堆積する砂・砂利層はあまりみられない。替わって砂礫が互層状に堆積する溝(Fig. 8、9・10層土)が確認できることから、中世末頃までは小規模ながら絶えず水は流れていたと考えられる。西部第一落合遺跡群(1)W-1では中世以降も流水の痕跡が見られ、近世頃に人為的に埋められた状況が確認されている。

W-2号溝 (Fig. 11, Tab. 3, PL. 2)

位置 X298、Y379・380 確認面 第1面 主軸方向 N-18°-W 規模 北側調査区の北東隅において、西側立ち上がり部のみ確認。底面の確認には至っていない。確認長2.37 m、上幅(0.80) m、下幅不明、深さ(0.42) m。形状 断面形状不明 重複 W-7と重複し、新旧関係は本遺構→W-7である。出土遺物 なし。時期 覆土にAs-B混土が含まれないことから古代の所産と想定される。

W-3号溝 (Fig.11・13, Tab. 3・4, PL. 2・4)

位置 X296～298, Y379～380 確認面 第1面 主軸方向 N-80°-E 規模 しっかりとした掘り込みをもつ直線的な溝。確認長8.36m、上幅0.92m、下幅0.47m、深さ0.25～0.35m。形状 断面形状は逆台形を呈する。底面は平坦。土層 覆土上位にAs-B軽石混泥土層が堆積している。それ以下ではAs-B軽石の堆積はみられない。重複 W-4と重複し、新旧関係はW-4→本遺構である。出土遺物 土師器・須恵器の小片が出土。断面六角形の砥石(1)を図示。時期 覆土状況から古代の所産と想定される。

W-4号溝 (Fig.11, Tab. 3, PL. 3)

位置 X296, Y379～381 確認面 第1面 主軸方向 N-21°-W 規模 北側ではやや蛇行し、南側は直線的に走行する。確認長6.67m、上幅0.42m、下幅0.21m、深さ0.10m。形状 断面形状は半円状を呈する。重複 W-3・6、D-3と重複し、新旧関係はD-3→本遺構→W-3・6である。出土遺物 灰軸陶器碗の小片のみ出土。時期 覆土の状況や重複関係から古代の所産と想定される。

W-5号溝 (Fig.12・13, Tab. 3・4, PL. 3・4)

位置 X297, Y385～388 確認面 第1面。南側調査区で確認。主軸方向 N-21°-W 規模 確認長10.15m、上幅1.42m、下幅0.59m、深さ0.72m。形状 断面形状は逆台形を呈する。土層 砂礫とシルトが互層状に堆積する。出土遺物 須恵器・土師器が出土。土師器坏(1-5)を図示。5点とも溝の最下層から出土している。時期 最下層から出土している土器の年代から溝の使用開始時期は8世紀代と考えられる。備考 走行方向から西部第一落合遺跡群(5)W-2と同一遺構とみられる本遺構は、西部第一落合遺跡群(1)W-2とも接続関係が考えられる(Ⅵ章 まとめ参照)。その場合、西部第一落合遺跡群(1)W-2は8～9世紀の年代と想定していることから、本遺構は8世紀代に開削され、9世紀代まで使用されていた溝と推測される。

W-6号溝 (Fig.11, Tab. 3, PL. 2)

位置 X296, Y379 確認面 第1面 主軸方向 N-89°-E 規模 W-3に平行するように直線的に走行する溝。確認長2.61m、上幅0.40m、下幅0.15m、深さ0.07m。形状 断面形状は浅い弧状を呈する。重複 W-4と重複し、新旧関係はW-4→本遺構である。出土遺物 須恵器・土師器が少量出土。時期 覆土の状況から古代の所産と想定される。

W-7号溝 (Fig.11, Tab. 3, PL. 3)

位置 X297・298, Y380 確認面 第1面 主軸方向 N-60°-W 規模 直線的に走行する溝。確認長2.55m、上幅0.45m、下幅0.15m、深さ0.12m。形状 断面形状は浅い弧状を呈する。重複 W-2と重複し、新旧関係はW-2→本遺構である。出土遺物 なし。時期 覆土の状況から古代の所産と想定される。

W-8号溝 (Fig.12・13, Tab. 3・4, PL. 3・4)

位置 X295・296, Y380～382 確認面 第2面のAs-C軽石混入土面で確認された。主軸方向 N-15°-W 規模 確認長5.00m、上幅(1.79)m、下幅(1.01)m、深さ0.23m。浅いピット状の窪みが2か所あり。性格は不明。形状 断面形状浅い弧状を呈する。出土遺物 Hr-FA洪水層土中から須恵器の坏身(1)が出土した。時期 Hr-FA洪水層によって埋没していることから、6世紀前半と想定される。備考 Hr-FP洪水層、Hr-FA洪水層によって埋没していることから、西部第一落合遺跡群(5)1区で確認された南北方向に走行する大溝と同一の遺構と考えられる。

3 土坑・ピット (Fig.11・12, Tab. 3, PL. 3)

土坑・ピットはP-5を除き、すべて北側調査区の第1面で確認されている。灰白色の総土砂層を掘り込み、それぞれの埋土で覆われている。計測値については「Tab. 3 溝・土坑・ピット計測表」を参照されたい。

D-3は上層に総社砂層のブロックを含んだ砂質土、下層に総社砂層とAsC軽石混入黒色土（所謂C黒）のブロックからなる粘質土が堆積し、中間層に炭化物粒を含んだ灰層が挟まる。底面には焼土も部分的にみられたことから建物跡ではないかと当初想定したが、出土遺物も少なく、建物跡としての決め手に欠けることから方形の土坑と判断した。



Fig. 6 調査区全体図 (1/200)

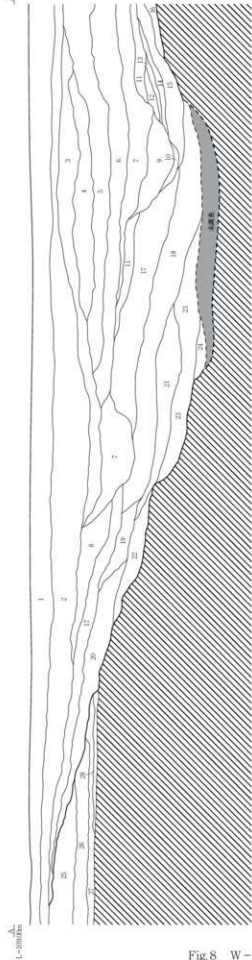


Fig.8 W-1号溝 (2)

W-1号溝 断面

- 1 基本土層(2)上
- 2 砂質土層(1)上
- 3 砂質土層(1)上
- 4 砂質土層(1)上
- 5 砂質土層(1)上
- 6 砂質土層(1)上
- 7 砂質土層(1)上
- 8 砂質土層(1)上
- 9 砂質土層(1)上
- 10 砂質土層(1)上
- 11 砂質土層(1)上
- 12 砂質土層(1)上
- 13 砂質土層(1)上
- 14 砂質土層(1)上
- 15 砂質土層(1)上
- 16 砂質土層(1)上
- 17 砂質土層(1)上
- 18 砂質土層(1)上
- 19 砂質土層(1)上
- 20 砂質土層(1)上
- 21 砂質土層(1)上
- 22 砂質土層(1)上
- 23 砂質土層(1)上
- 24 砂質土層(1)上
- 25 砂質土層(1)上

- 16 砂質土(1)07754.6 砂質土層(1)上
- 17 砂質土層(1)上
- 18 砂質土層(1)上
- 19 砂質土層(1)上
- 20 砂質土層(1)上
- 21 砂質土層(1)上
- 22 砂質土層(1)上
- 23 砂質土層(1)上
- 24 砂質土層(1)上
- 25 砂質土層(1)上

断面番号は断面位置、()内は断面の中心位置を示す。断面番号は断面位置を示す。





Fig.9 W-1号溝 (3)

W-1 溝状遺構・平場状遺構

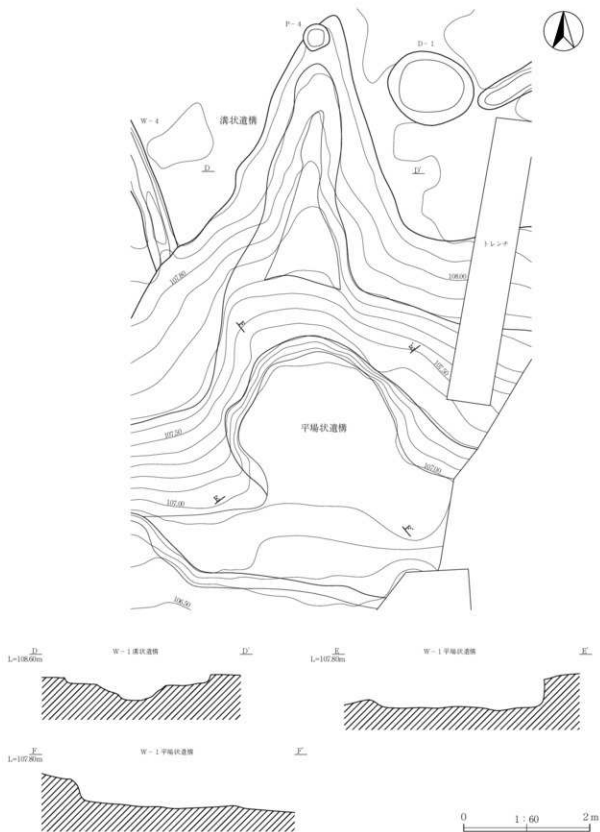
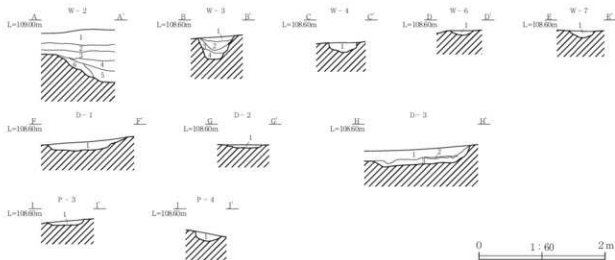
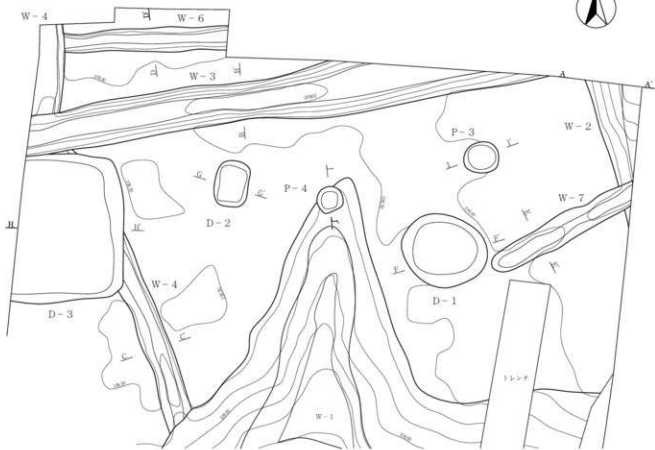


Fig.10 W-1号溝(4)

W-2~4・6・7、D-1~3、P-3・4



W-2号溝 SPA

- 1 基本土層1層上
- 2 基本土層2層上
- 3 底層土上 (JOYK3-4) 白色礫石を少量含む。締り有り、粘性有り。
- 4 底層土上 (JOYK3-4) 白色礫石を少量含む。締り有り、粘性有り。
- 5 底層土上 (JOYK3-4) 底層色砂状土層。白色礫石を少量含む。締り有り、粘性有り。
- 6 底層土上 (JOYK3-4) 底層色砂状土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性有り。

W-3号溝 SPB

- 1 底層土上 (JOYK3-4) Aa2層石混土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性やや強い。
- 2 底層土上 (JOYK3-2) 底層色砂状土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性やや強い。
- 3 底層土上 (JOYK3-2) 底層色砂状土層。締り有り、粘性やや強い。
- 4 底層土上 (JOYK3-4) 底層色砂状土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性強い。

W-4号溝 SPC

- 1 底層土上 (JOYK3-4) 底層色砂状土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性やや強い。
- 2 底層土上 (JOYK3-4) 底層色砂状土層。締り有り、粘性やや強い。

W-6号溝 SPC

- 1 底層土上 (JOYK3-4) 底層色砂状土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性やや強い。

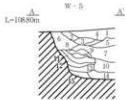
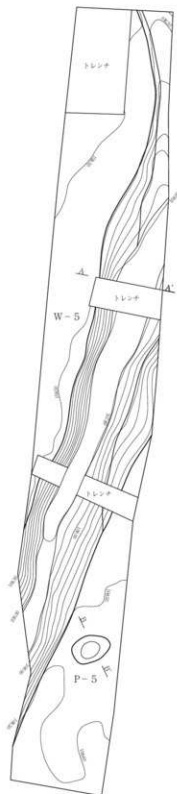
W-7号溝 SPC

- 1 底層土上 (JOYK3-4) 底層色砂状土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性やや強い。

D-1号土坑 SPF

- 1 底層土上 (JOYK3-2) 底層砂礫石を少量含む。底層色砂状土層。締り有り、粘性強い。
- 2 底層土上 (JOYK3-2) 底層土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性強い。
- 3 底層土上 (JOYK3-2) 底層土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性強い。
- 4 3号土坑 SPH
- 1 底層土上 (JOYK3-2) 底層土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性やや強い。
- 2 底層土上 (JOYK3-2) 底層土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性有り。
- 3 底層土上 (JOYK3-2) 底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性やや強い。
- 4 4号土坑 SPJ
- 1 底層土上 (JOYK3-2) 底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性強い。
- 2 底層土上 (JOYK3-2) 底層土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性強い。
- 3 底層土上 (JOYK3-2) 底層土層。底層砂礫石を少量含む。締り有り、粘性強い。

Fig11 W-2~4・6・7号溝、D-1~3号土坑、P-3・4号ピット



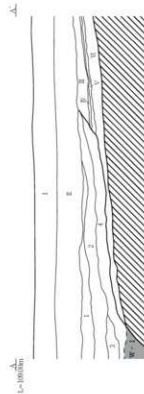
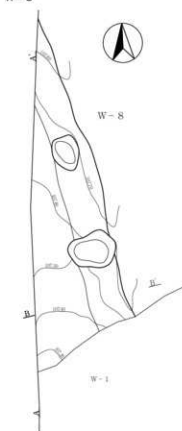
W-5号溝 SPA

- 1 埋戻土 (10Y3/3-4) 埋戻色砂質土層、石灰質を微量含む、締り有り、粘性有り。
- 2 埋戻土 (10Y3/3-1) 埋戻土シフト、締り有り、粘性有り。
- 3 埋戻土 (10Y3/3-1) 砂利層、締り強い、粘性強い。
- 4 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻色シフト、締り有り、粘性有り。
- 5 埋戻土 (10Y3/3-3) 砂層、締り強い、粘性強い。
- 6 埋戻土 (10Y3/3-1) 埋戻色砂質土層、締り有り、粘性有り。
- 7 埋戻土 (10Y3/3-3) 砂利層、締り強い、粘性強い。
- 8 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻色シフト、締り有り、粘性有り。
- 9 石灰質埋戻土 (10Y3/3-3) 砂層、締り強い、粘性強い。
- 10 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻土シフトの上部、締り有り、粘性強い。
- 11 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻色粘質土層、締り有り、粘性有り。
- 12 埋戻土 (10Y3/3-1) 埋戻土シフト、砂利が少量混じり、締り有り、粘性有り。
- 13 石灰質埋戻土 (10Y3/3-2) 石灰質埋戻土シフト、締り有り、粘性有り。
- 14 埋戻土 (10Y3/3-1) 砂利層、シフトが少量混じり、締り強い、粘性強い。
- 15 埋戻土 (10Y3/3-1) 砂利層、締り強い、粘性強い。

P-5号ピット SPA

- 1 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻砂質土を微量含む、締り有り、粘性強い。

W-8



W-8号溝 SPA

- I 表土層 埋戻土 (10Y3/3-3) 白色軽石を少量含む、締り有り、粘性有り。
- II 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻色砂質土層、締り有り、粘性有り。
- III 石灰質埋戻土 (10Y3/3-2) 石灰質埋戻土層、締り有り、粘性有り。
- V 埋戻土 (10Y3/3-4) 埋戻土シフト層、締り有り、粘性有り。
- VI 石灰質埋戻土 (10Y3/3-2) 石灰質埋戻土層、締り有り、粘性強い。
- 1 埋戻土 (10Y3/3-2) 埋戻色粘質土層、締り有り、粘性有り、W-1層上。
- 2 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻土シフト、締り有り、粘性有り、W-1層上。
- 3 埋戻土 (10Y3/3-3) 埋戻色砂質土層、締り有り、粘性有り、W-1層上。
- 4 埋戻土 (10Y3/3-4) 埋戻色砂質土層、締り有り、粘性有り、W-1層上。

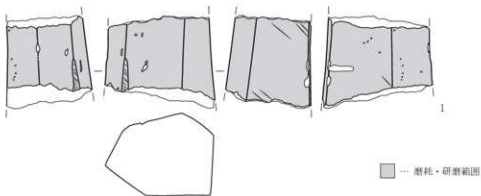


Fig.12 W-5・8号溝、P-5号ピット

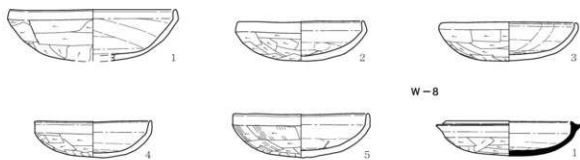
W-1



W-3



W-5



W-8



遺構外

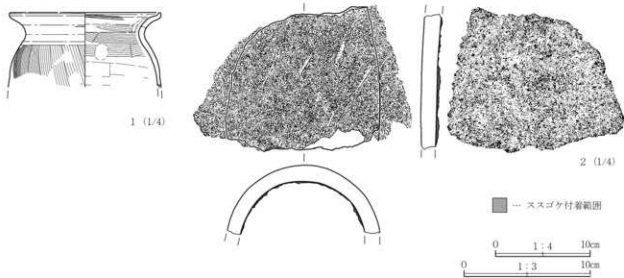


Fig.13 出土遺物

Tab. 3 溝・土坑・ピット計測表
溝

選掘名	確認面	グリッド	主軸方向	掘削長 (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	断面形状	備考
W-1	第1面	X295 ~ 296, Y380 ~ 385	N - 70° - E	10.02	(13.52)	4.35	2.75	階段状の逆台形	
W-2	第1面	X298, Y379 ~ 380	N - 18° - W	2.37	(0.80)	不明	(0.42)	不明	
W-3	第1面	X296 ~ 298, Y379 ~ 380	N - 80° - E	8.36	0.92	0.47	0.25 ~ 0.35	逆台形	
W-4	第1面	X296, Y379 ~ 381	N - 21° - W	6.67	0.42	0.21	0.10	半円状	
W-5	第1面	X297, Y385 ~ 388	N - 21° - W	10.15	1.42	0.59	0.72	逆台形	
W-6	第1面	X296, Y379	N - 89° - E	2.61	0.40	0.15	0.07	浅い弧状	
W-7	第1面	X297 ~ 298, Y380	N - 60° - W	2.55	0.45	0.15	0.12	浅い弧状	
W-8	第2面	X295, Y380 ~ 382	N - 15° - W	5.00	(1.79)	(1.01)	0.23	浅い弧状	

土坑

選掘名	確認面	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状
D-1	第1面	X297, Y380	1.38	1.15	0.17	楕円形
D-2	第1面	X296, Y380	0.72	0.35	0.06	長方形
D-3	第1面	X296, Y380	2.37	(1.73)	0.35	方形

ピット

選掘名	確認面	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状
P-3	第1面	X297, Y380	0.57	0.51	0.08	円形
P-4	第1面	X297, Y380	0.42	0.42	0.19	円形
P-5	第1面	X297, Y388	0.62	0.42	0.10	楕円形

※ P-1・2は欠番

Tab. 4 出土遺物観察表

W-1

No.	出土位置	種別・器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	残存状況・備考
1	中層	灰陶器 段蓋	(14.0)	(7.8)	2.4	胎土質、白・黒色粒	窯成	灰白	外面口縁部コナダ。底部部出し高内。口縁から底部区輪縁部。 内面口縁部コナダ。底部中央に有段。口縁から底部区輪縁部。	1/4 残存。 灰陶器。
2	中層	灰土器 高内部分	9.2	高内部分 欠損	(3.3)	白色系粉粒。白・黒・灰色粒	窯成	灰白黒	外面口縁部コナダ。下部部回転ヘラケズリ調整。底部回転縁部有段。高内部分付け。高内内回転ヘラケズリ調整。外部上半部塗層付着。 内面口縁部コナダ。底部ヘラミガキ調整。全体に厚く油層付着。黒色粉粒少。	口縁の一部及び高内部分欠損。 内面黒色粉粒少。
3	上層	かわらけ	7.2	5.3	1.6	白・黒・灰色粉粒	窯成	灰白	外面口縁部コナダ。底部回転ヘラ切り。口縁部に油層付着。 内面口縁部コナダ。口縁部に油層付着。	口縁部一部欠損。

W-3

No.	出土位置	種別・器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形・成・整形・文様等の特徴	残存状況・備考
1	遺土	石製品 砥石	(7.3)	(8.7)	(6.8)	玄武岩	-	-	472.5	横断面は6面。表・裏面及び右側面は約5mm程度の厚さ。左側面と上面は約10mm程度の厚さ。上面は約3～4mm程度の厚さ。右側面と裏面には溝状の凹状痕跡が複数認められる。	破片。

W-5

No.	出土位置	種別・器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	残存状況・備考
1	中層	土器 杯	(13.6)	丸底	(4.1)	石灰、黒雲母、白色系粉粒	良好	橙	外面口縁部コナダ。外部との境に線をもち、口縁部僅かに内湾。以下底部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部コナダ。以下ヘラケズリ。	1/3 残存。
2	下層	土器 杯	9.9	丸底	3.2	石灰、黒雲母、白色系粉粒	良好	明褐色	外面口縁部コナダ。外部との境に明確な線をもち、口縁部内湾。以下底部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部コナダ。以下ヘラケズリ。	欠存。
3	下層	土器 杯	10.9	丸底	3.1	石灰、黒雲母、灰色粒	良好	明褐色	外面口縁部コナダ。外部との境に緩やかな線をもち、口縁部内湾。以下底部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部コナダ。	欠存。
4	下層	土器 杯	9.3	丸底	2.9	黒雲母、白色系粉粒、白・チャート	良好	明赤褐色	外面口縁部コナダ。外部との境に線をもち、口縁部は直立して口縁部僅かに内湾。以下底部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部コナダ。以下ヘラケズリ。	欠存。
5	下層	土器 杯	10.8	丸底	3.5	石灰、黒雲母、チャート、黒色粒	良好	橙	外面口縁部コナダ。外部との境に明確な線をもち、口縁部僅かに内湾。以下底部から底部ヘラケズリ。 内面口縁部コナダ。以下ヘラケズリ。	欠存。

W-8

No.	出土位置	種別・器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	残存状況・備考
1	川ノ子 高層	灰土器 杯	9.9	丸底	2.8	白色系粉粒。黒・灰色粒	焼成	灰	外面内傾する口縁部及び厚壁で突出する肩受け部回転ヘラ調整。 内面口縁部回転ヘラ調整。 内面口縁部コナダ。以下回転ヘラ調整。	7/8 残存。 肩受け部厚 115.0mm。

遺構外

No.	出土位置	種別・器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形・成・整形・文様等の特徴	残存状況・備考	
1	南側溝内 溝底	土器 器	(16.0)	欠損	(7.8)	石灰、黒雲母、チャート	良好	1.50-橙	外面口縁部コナダ。口縁は水平気味に内湾して口縁部で短く立ち上がる。胴部コナダ。以下胴部上段縁付ハケ目。 内面口縁部コナダが後縁付ハケ目。胴部から胴部上段縁付ハケ目。以下ヘラケズリ。	口縁一部土位片。	
2	北側溝内 溝底	瓦 瓦丸	(15.3)	(16.1)	(7.4)	白・黒・灰色粒。輝石	今令焼成	明赤褐色	696.3	外面凹付ヘラケズリ。 外面に積層によるスエッグ調整。凸凹が滑しい。	底部中央付。 中柱。

VI まとめ

今回の調査成果からいくつかの事項に関して考察を行い、まとめとしたい。

1. W-1

2 遺跡で確認された W-1

本遺跡で確認された W-1 (以下、W-1 (6)) は規模・位置関係、埋土の堆積状況から西部第一落合遺跡群 (1) で検出された大型の溝、W-1 (同、W-1 (1)) と同一遺構であると考えられる。ここでは 2 地点で確認された溝を比較し、共通点と相違点について注目してみたい。

W-1 (1) は、上幅 [17.88] m、下幅 [13.79] m、深さ 1.85 ~ 2.37 m。W-1 (6) は上幅 (13.52) m、下幅 4.35 m、深さ 2.75 m と、上下幅に関しては W-1 (6) より W-1 (1) の方が広い結果となっている。下流部は上流部より幅が広くなると考えられることから、W-1 (6) が上流部、W-1 (1) が下流部と想定され、水の流れが東から西であったことが想定される¹¹⁾。

それぞれの底面の標高値は W-1 (1) が 105.55 ~ 105.78 m、W-1 (6) が 105.69 ~ 105.80 m とあまり差がみられない。底面の状況は主軸方向に沿って溝状の凹凸が W-1 (1) で確認されている。水流により底面が削られた痕跡と考えられる。断面形状は台形と共通しているが、W-1 (1) は幅が広い台形、W-1 (6) は幅狭く、中段を持つ階段状の台形と違いがみられる。

埋土に関しては大きな違いは見られない。底面から中位にかけてはシルト、砂質土、粘土を主体とした土層が堆積しており、これらは流水によって運ばれた土砂であると考えられる。As-B 軽石層の下層には粘質土層が厚く堆積している。As-B 軽石降下時には水の流れはすでに弱まっており、泥が溜まる湿地のような景観であったと想像される。土層断面においては As-B 軽石層を掘り込むような溝の断面が確認できる。As-B 軽石降下後は小さな溝へ移り変わり、絶えず水が流れていた様子が窺える。W-1 (1) では江戸時代頃に埋められたと考えられる埋め土 (総社砂層・暗褐色土粘土のブロック状の土) が確認されているが、W-1 (6) ではその状況は見られない。

以上、近接している場所から検出していることもあるため共通する点が多いが、断面形状については違いがみられた。また平面形状についても、W-1 (6) は次項で述べる溝状遺構と平場状遺構が付随している影響から、W-1 (1) の形状との差異がみられる。

溝状遺構と平場状遺構

W-1 の北側立ち上がり部で溝状遺構と平場状遺構が確認された。覆土状況や W-1 との位置関係から W-1 に付随する施設である可能性が高いと考えられる。ここではこの 2 つの遺構について検討を行い、どのような性格の遺構であるのか想定してみたい。

溝状遺構は平面図では W-1 から三角状に突出する遺構である。底面は南へ向かって傾斜している。覆土に砂・砂利等の水が流れた痕跡は確認されていないことから、排水用の溝であったことは考え難い。平場状遺構は隅丸方形形状を呈し、比較的平坦な底面を有する¹²⁾。南側は W-1 に接し、北・西側はやや直立気味に壁が立つ。この 2 つの遺構の特徴から、溝状遺構は平場状遺構へ降りていくための通路、平場状遺構は W-1 際で作業する空間 (作業場) であったのではないかと考えられる。この作業場は W-1 で水を汲む等の水場として使用されたり、この場所が船着き場で荷揚げをしていたのかもしれない。それらを示す痕跡や遺物が出土していないため想像の域を出ることはないが、可能性としては決して低くないと思われる。

W-1 の成りたち

これまでの W-1 や周辺域の調査成果を基に W-1 の成りたちについて推測してみたい。かつて牛池川

と染谷川に挟まれた台地上には相馬ヶ原扇状地を源とする中小河川が存在していた。両河川の流が現在の位置に落ち着くと中小河川は埋没し、浅く緩やかな台地上の低地帯と化していったと考えられている（中村2018）。W-1の前身はこの低地上を流れていた小河川であったと推測される。小河川はやがて人為的に開削され大きな溝へ生まれ変わり、豊富な水を取り入れることになる。人の手による開削を示す痕跡は確認されていないが、その規模・形状や牛池川と染谷川との位置関係から考えて、人為的に掘削が行われた可能性は高いと考えられる。牛池川から取り込んだ水は、溝の南側に広がる台地上に営まれた集落域へ配水していた可能性が高い。台地の集落は8世紀以降に増加する傾向がみられる。W-1から引水した溝（西部第一落合遺跡群（1）W-2～4）も出土遺物から8・9世紀の時期を示していることから、W-1の開削時期も近い年代であったのではないだろうか。

2. W-3

調査区の北隅で確認されたW-3はその走行方向から、推定東山道国府ルートの駅路に付随する側溝である可能性が考えられる。落合地区周辺は推定東山道国府ルートの通過地点として以前から研究者の注目を受けていた地域である。推定東山道国府ルートは高崎市八幡町付近から上野国府推定地である前橋市元総社町付近に向かって北東方向（N-64°-E）に走行する駅路であり、落合地区はこの東側延長部にあたる。しかし、これまでの落合遺跡群の調査では駅路・側溝と考えられる遺構の検出には至っていない。

どこに駅路が通っていたのだろうか。W-1の南側台地上は7世紀後半以降、集落域が広がることから可能性は低いと考えられる。可能性が高い場所は現在の小河原用水南側の現道下、あるいはW-1の北側ではないだろうか。今回の調査でW-1北側の状況を確認することができた。そこへ東西方向に走行するW-3が検出された。駅路の側溝である可能性が考えられたため、W-3北側の拡張調査を行ったが、残念ながら硬化面などの道路遺構を示すような痕跡は確認できず、同じ東西方向に走行する小さな溝（W-6）のみが検出された。今回の調査結果だけでは東山道駅路の側溝であると断定することは難しい。判断材料が少ないため今回は側溝である可能性の提示としたい。今後行われるであろう本遺跡の北側に隣接する区画の発掘調査の成果に期待したい。

3. W-5

W-5（以下、W-5（6））はV章において、西部第一落合遺跡群（5）1区W-2（同、W-2（5））と同一遺構であると述べた。また、この溝は西隣で確認されている西部第一落合遺跡群（1）W-2（同、W-2（1））とも接続する関係にある。これまでの調査成果を基に関係性について説明する。

W-5（6）とW-2（1）は共にW-1から供給された水を下流域へ流していた溝である。W-2（1）から

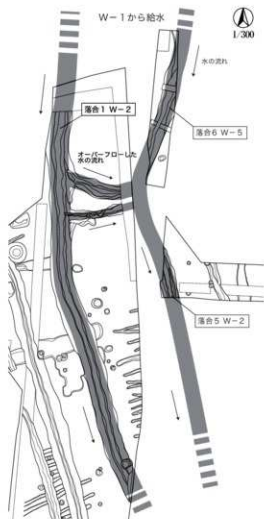


Fig.14 W-5周辺の溝

は小さい溝2条(W-2 a・b(1))がW-5(6)へ接続する。この小さい溝はW-2(1)と比較して底面が高いことからW-2(1)からオーバーフローされた水を流す役を担っていたと考えられる。そうすることによりW-2(1)の水量を調整することができ、安定的に水を流すことができたと推測される。

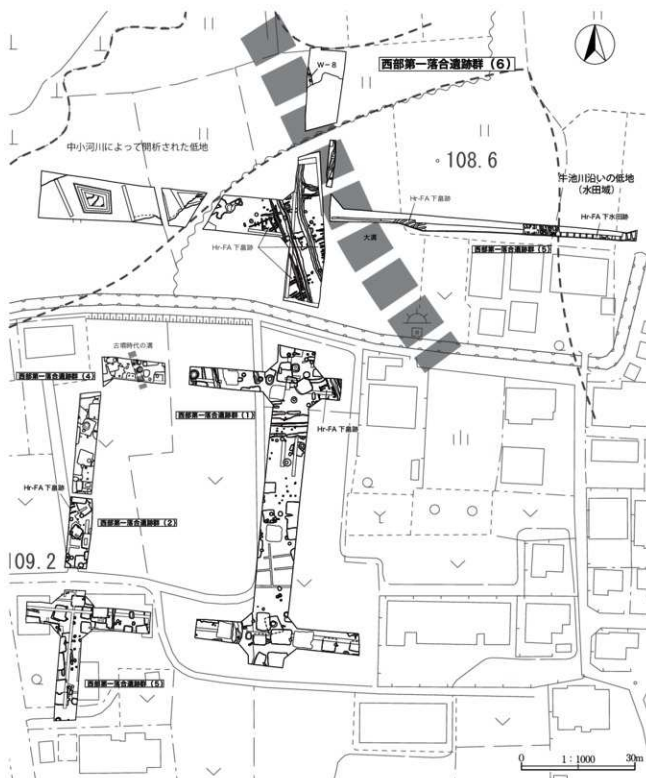


Fig.15 西部第一落合遺跡群(6)周辺の古墳時代の景観想定図

4. 本遺跡周辺の景観想定

落合遺跡群周辺の古墳時代と古代の景観については『西部第一落合遺跡群（5）』の「V章 まとめ」にて記した。それに今回の調査成果を付け加えて、改めて周辺景観について概観してみたい。

古墳時代

落合地区において概期の竪穴建物跡は少なく、大溝周囲には畠、牛池川沿いの低地には水田などの生産遺

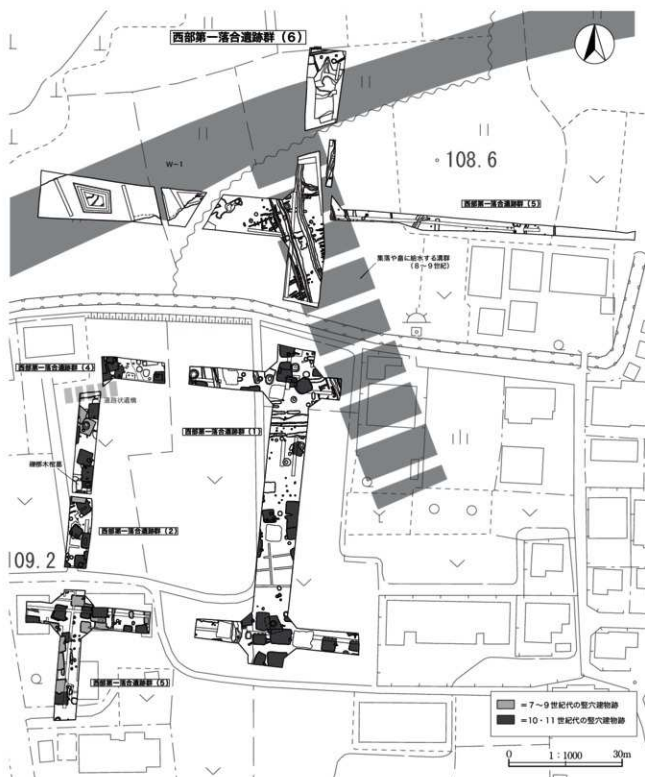


Fig.16 西部第一落合遺跡群（6）周辺の古代の景観想定図

溝が分布する。集落域は落合地区の周縁部にあたる牛池川の左岸や染谷川の両岸の自然堤防上に営まれていたと推測される。落合地区はその集落に住まう人々の生産域であったと考えられる。

古代

古代になると W-1 より南側で集落が広がり始める。7 世紀後半から 11 世紀にかけての堅穴建物跡が確認されていることから、連続と集落が営まれていたと考えられる。W-1 周縁部南側では W-1 より引水し下流域へ配水するための溝が作られる。W-1 北側（本遺跡）にも溝が数条確認されている。W-1 周縁部にまで集落域が広がらないことを考慮すると、7 世紀後半頃には W-1 あるいは前身となる溝があり、それを避けるように集落域が形成されていったと考えられる。

5. 焼けた瓦

遺構外遺物で図示した丸瓦（巻頭図版 2）は北側調査区の表土層から出土している。中世の所産と考えられるこの瓦は、内面にのみ煤焦げが広く付着し、まるで火災にでもあったような状態がみられる。

本遺跡の北西に位置する釈迦尊寺は、古くは現在の位置ではなく北東約 400 m の小字八日市場地内にあったと伝わっている（近藤 1990）。永祿六年（1563）、甲州勢（武田勢か）の兵火により寺は焼失してしまう。その後、末寺である「竜松寺」があった現在の場所に移ったと寺に伝わる¹⁵⁾。この瓦が焼失した釈迦尊寺の瓦であるという根拠はないが、現在の釈迦尊寺の南東に位置する本遺跡まで流れてきたのではないかと想像してしまう。

註釈

1. 現在、調査区の南側には小河原用水が流れており、W-1 と同様に東から西へと水が流れている。
2. 溝の傾斜地に作られた平場状の遺構は元総社舊海遺跡群（145）で確認されている（T-1~3）。山側に壁を持ち平坦な底面を有するこれらの遺構は総社砂層の切石を採掘した際の作業場と考えられる。
3. 西部第一落合遺跡群（5）2区 H-14 は古墳時代（6 世紀後半）の堅穴建物としていたが誤りであり、7 世紀後半の年代と訂正したい。
4. 西部第一落合遺跡群（1）W-2~4
5. 「釈迦尊寺開闢山來書」について（前橋市教育委員会 2004 「1 文化財調査委員会による調査」『前橋市文化財調査報告書 平成 16 年度』）

参考文献

論文

- 近藤昭一 1990 「釈迦尊寺純観造阿弥陀如来坐像」『史迹と美術』605 史迹美術同友会
中村彦彦 2018 「『能定上野国府』周辺の古代景観」『群馬文化』第 332 号 群馬県地域文化研究協議会
市町村史

- 前橋市史編さん委員会 1971 『前橋市史』第 1 巻
群馬県史編さん委員会 1989 『群馬県史』通史編 3 中世

図録

- 群馬県立歴史博物館 2001 『古代のみち - たんけん! 東山道駅路-』

報告書

- 前橋市教育委員会 2004 『前橋市文化財調査報告書 平成 16 年度』
前橋市教育委員会 2020 『西部第一落合遺跡群（1）』
前橋市教育委員会 2021 『元総社舊海遺跡群（145）』
前橋市教育委員会 2021 『西部第一落合遺跡群（2）』
前橋市教育委員会 2022 『西部第一落合遺跡群（3）』
前橋市教育委員会 2022 『西部第一落合遺跡群（4）』
前橋市教育委員会 2023 『西部第一落合遺跡群（5）』



調査区全景（上が東）

W-1 全景（南西から）
（破線は溝主軸方向を示す）W-1 南側壁面近景（西から）
（破線は溝の立ち上がりを示す）W-1 南側近景（東から）
（破線は溝の南側ラインを示す）

W-1 北側立ち上がり部全景（南から）



W-1溝状遺構全景（北から）



W-1平場状遺構全景（南東から）



W-1全景（北から）



W-2全景（南から）



W-3・6全景（西から）



W-3全景（東から）



W-4 全景 (南から)



W-5 全景 (南から)



W-7 全景 (西から)



W-8 全景 (北から)



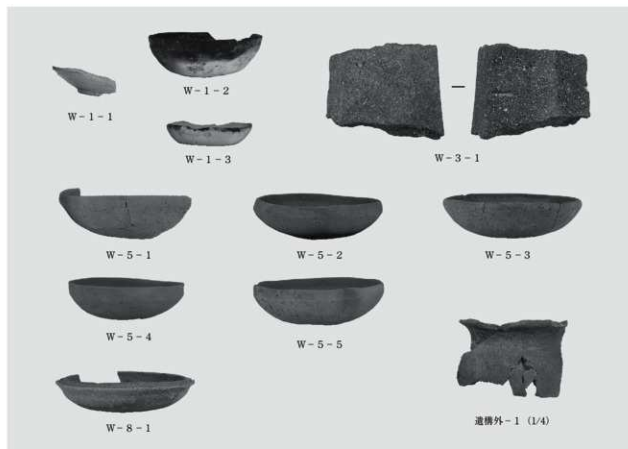
D-1、P-3・5 全景 (南東から)



D-3 全景 (北から)



総社砂層堆積状況 (西から)



報告書抄録

カタカナ	セイブダイナオチアイセキダン (6)
書名	西部第一落合遺跡群 (6)
副書名	前橋都市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	佐野良平
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市国領町2-21-12
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4
発行年月日	2025年1月31日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
西部第一落合遺跡群 (6)	群馬県前橋市元北社町2510-2, 2511の各一部	102016	6A293	36°23'00"	139°02'19"	20240710 / 20240830	265㎡	前橋都市計画事業 西部第一落合 土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
西部第一落合遺跡群 (6)		古墳時代		溝 1条		土師器		・古代から中世まで流水していた大型の溝・堀跡
		古代～中世		溝 土埃 ピット		灰釉陶器 土師器 須臾器		

西部第一落合遺跡群 (6)

群馬県前橋市計画事業西部第一落合土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2025年1月17日 印刷

2025年1月31日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3-11-4

TEL: 027-280-6511

編集 技研コンサル株式会社

印刷 朝日印刷工業株式会社